



海外・現場最前線からのお便り

海外で活躍する林野庁職員の近況をシリーズで報告します

国際機関ではたらく

① 国連食糧農業機関での業務

国連食糧農業機関（FAO）は世界の農林水産業の発展と農村開発に取り組む国際連合の専門機関です（写真①）。その活動は各国等からの拠出金により支えられ、現在予算のおよそ7割が任意拠出金、3割が加盟国に義務づけられる分担金により構成されています。

私の所属する部署は任意拠出金の調達を調整する役割を担っています。日本からFAOへの主な任意拠出には、林野庁をはじめ農林水産省からの拠出金事業のほか、外務省拠出金による事業、独立行政法人国際協力機構（JICA）との連携事業があります。私は現在、これら任意拠出に関するドナー窓口の担当として、日本政府からの拠出金の受け取りにかかる合意文書をはじめとする各種調整及び関係するFAO内の各プロジェクトチームのサポートなどを担当しています。

任意拠出金のドナー窓口は業務の性格上、多岐にわたるFAO内部の



写真① 加盟国の国旗が並ぶFAO本部外観

規則、また関係するFAO内の法務や財務、人事など各部署の主要な点を把握している必要がありますが、他方で部署内ではスタッフの入れ替わりが比較的頻繁に行われ、知識やノウハウの共有、伝達が難しい場合もあります。そこで私は、皆がスムーズに働けるよう、内部ガイドランスの改訂作業も進めています。

国際機関での勤務を通じた印象として、コミュニケーションの取り方や同僚との共通認識の幅が日本や日



国連食糧農業機関(FAO)
本部(イタリア・ローマ)
資源動員及び民間セクター
パートナーシップ部、準専門家
田中 ゆり子



写真3 世界森林週間のイベント



写真2 森林由来の食品の展示



写真4 コルクガシ (写真はモンテ・カティッロ 自然保護区)



写真5 オリーブ畑

2

FAOでの林業関係の会合

本語で働いていたときとは異なると感じるときがあります。2020年末の着任後しばらくは、新型コロナウイルス対策のため国内の移動やオフィスへの出勤の制限が続く、部署内でも直接顔を合わせたことのない同僚もいるなど、勝手がつかめず戸惑うこともありました。オフィスに人が戻りつつある現在、直接話せることの有難さを実感しています。

FAOでの森林・林業に関する最近の大きな話題として、本年10月3日から7日にかけて、第26回FAO林業委員会(COFFO26)が会場とオンラインのハイブリッド形式にて開催されました。2年に一度開催される、COFFOの1週間の会合は、

出席者による対話の場を提供するとともにFAOの林業分野における将来の活動の戦略的方向性を検討します。本会合の最終日にはCOFFO26のレポートが採択されました。日本からは林野庁の代表団が参加し、木材の持続可能な生産と利用、「伐つて、使って、植えて、育てる」循環サイクルの重要性について発信するなど、委員会での議論に貢献していました。

併せて開催された第8回世界森林週間(9月29日〜10月7日)では多くのイベントが行われ、FAO本部のホールでは森林由来の食品などが展示(写真2)されました。そのうちの一つ、「森林経営における生物多様性の主流化」(写真3)では、生物多様性の保全を森林経営へ組み入れることに関する、これまでの調

3

ヤングリンク

査研究の成果や事例が発表されました。事例の中で、日本からはイヌワシの生息環境改善に着目した赤谷プロジェクトの取組が紹介されました。

日頃の仕事はデスクワークですが、週末にはリフレッシュと健康維持、当地の観察を兼ね、ローマ近郊の山など、なるべく郊外へ足を向けるよう心掛けています(写真4、5)。

FAOウェブサイト

<https://www.fao.org/home/en>



FAO 駐日連絡事務所
ウェブサイト

<https://www.fao.org/japan/jp/>

